


弥生 vol.16



灯
り

令和元年6月発行 弥生神社

灯り

- 02 テントの中の灯り 森 岳人
- 03 砂漠を灯す 和田 浩一郎
- 05 あかり・行灯・化けた猫 ―怪異覚書― 玉井ゆかり
- 09 本を読む「灯り」 小河洋友
- 10 植物紀行「ホタルブクロ」 荒谷渚
- 11 蛍の自転車 カイズケン
- 12 旅の止まり木・8 「誰かがいます」 谷口明子
- 13 ともしび 高崎淳子
- 15 山歩きと生命の灯り 黒崎浩行
- 17 山の時間 「井の中の蛙」 中村政子
- 19 神話へのまなざし ―火神の出生をめぐる― 中村 聡
- 21 蚕の神様を訪ねて (四)「春蚕の季節～蚕種紙と掃き立ての縁起物～」 谷口悌三
- 23 泥染めの旅 ～奄美大島へ～ 上岡和江
- 25 季節のレシピ 「パイナップルケーキ」

テントの灯り

森 岳人（書籍編集者）

ロウソクを囲んで、山男たちがゆらゆらと燃える火を見つめている。ひとりが、溶けかけた蠟をせっせと崩して遊んでいる。彼は火に取り憑かれていた。おおよそ無意味な行為を繰り返す彼の背後には大きな影が控えて、黒眼の中に炎があった。

「拝火教」——ふと、そんな言葉が頭をよぎった。火を崇拜する善神と暗黒の悪神が戦う善悪二元論。暗闇を照らす火が善であるとは、ずいぶんと単純な図式に思える。しかし照らすのが火ではなく、ヘッドライトだったら、果たして神は宿ったのだろうか。

古来、暗闇を照らす明かりは、「灯り」であつたはずだ。つまり「火」である。電灯が登場したのは、たつた二〇〇年ほど前。江戸時代の明かりも行灯であつたし、それはよく火事の原因ともなつた。「火」は明かりをもちたらずが、同時に禍ももたらす。だからこそ人々は火に人智を超えた力を感じ、神が宿つた。今でも様々な祭祀や儀式で火が焚かれるのは、人々がそこに魔力を見るからだろう。



東日本大震災の時、計画停電が実施され、久しぶりにロウソクを手にとつた。電力消費を抑えるために電飾看板や電灯は間引かれ、街はだいたいぶ落ち着いた霧囲気になつた。そんな街を見て「もともと明るすぎたんだ」なんて声を聞いたりが、いつの間にかまた街は煌々と照らされ、暗闇は消えた。

電気の明かりは、強すぎる。

強く明るい光は、対象物の凹凸を消失させ、個々の微妙な差異を奪つ。社会の隅々まで照らし出し、個人を瞬時に丸裸にする。そんな社会はのっぺりとして攻撃的だ。絶えず冷たい光の銃弾が飛び交い、炎上している。

火の灯りは、光量が限られる。だがやさしく陰影を生み出し、物事の表と裏を浮かび上がらせる。暗闇を認識させ、時に温もりを与えてくれる。

たまには電灯を落とし、スマホやPCも切り、ロウソクの火に取り憑かれてみるのもいいかもしれない。

（文／もり・たけこ）

砂漠を灯す

和田浩一郎
(エジプト学研究者)



灯明の形をした呪具

星空にほの白く浮かびあがる砂漠の上を、犬の一団が黒い塊になって静かに進んでいく。その砂漠の只中に、人里離れて営まれた家々を取り囲む、白い壁がひっそりと立っている。朝から砂漠のさらに奥にある、王の墓づくりに駆り出されていた工人たちも、いまはそれぞれの家に戻り、のんびりと団欒を楽しんでいる。家々の板戸の隙間からは室内の灯りが漏れ、まだ昼間の熱を持つ通りに、細い光の筋を投げかけている。

古代エジプト人の日常生活は太陽神と共にあった。つまり彼らは日の出と共に活動をはじめ、日没と共に家路につく日々を送っていたのである。とはいえ夜間や薄暗い室内での活動のためには、もちろん灯りも必要だった。古代エジプト王朝時代のランプは陶製や金属製で皿や鉢の形をしており、日本の油皿と同じように灰受けの「罌つば」を持つものもある。こうしたランプは壁龕がんに置かれたり、なかにはパピルス草を模した背の高いスタンドを伴うものもあった。灯芯は亜麻糸を撚り合せて作られた。植物油を使うこうしたランプは、富裕層の家では珍しいものではなかっただろうが、庶民の場合は居間に設けられた炉の炎だけが頼りの家庭も多かったことだろう。

灯りは人々だけでなく、神々の日常生活のなかでも大切な役割を果たしていた。御神体が安置された神殿の至聖所（内陣）は秘密の空間であり、内部は真っ暗だった。この暗闇を照らすのは、特別に飼育された犠牲の牛の脂を、赤い灯芯に染みこませた灯明だった。神官たちは朝の儀式を始める前にまず灯明に火を灯し、それを持って至聖所に入り、神の起床と朝食の奉獻を執り行ったのである。

夜はこの世とあの世の境界があいまいになり、神やアク（再生）を果たした「善良な」死者の力を借りる呪術の効果が高まる時間帯と考えられた。それは他方では、あの世に棲む魔物や悪霊、さらには実体のある害ある存在が忍び寄る危険な時ということも意味していた。従って夜の闇を打ち破る方策として、灯り（炎）が重要な役割を果たすようになるのは、至極当然のことだった。



油皿



灯明台

墓には被葬者を魔術的に守るさまざまな呪具が備えられたが、その中には灯明を模したものも見られる。玄室の南壁の壁龕に置かれたこの呪具には、こんな言葉が添えられている。

我は隠れたる部屋（玄室）の壁で、砂に罫をかける者なり

力強い戦闘者は、砂漠の炎へと彼の者を追い払う

我は砂漠を灯し、我は道を逸らせる

我はオシリスの守りなり

（文・写真／わだ・こういちろう）

〜和田浩一郎 著〜

『古代エジプトの埋葬習慣』（2014）株式会社ポプラ社

あかり・行灯・化けた猫

—怪異覚書—

玉井 ゆかり（宗教民俗学）

はじめに — 行灯のこと —

行灯と書いて「あんどん」と読む。江戸時代にもっとも広く使われた照明器具である。

図二のような灯明皿に灯油を注ぎ、灯心を入れて油をしみこませ、点火する。これだけでは光量が乏しく、風で吹き消されやすい。そこで、木枠に和紙を貼った覆いの中に灯明皿をセットしたものが「行灯」で、



図一 鈴木春信「座敷八景 行灯の夕照」
一七六六年（浮世絵検索 <https://ukiyo-e.org> より）



図二 現代の灯明皿
（高野好見量店 web サイトより）



図三 葛飾北斎「北斎漫画」
（国会図書館デジタルコレクションより）

読んで字の如く、もとは外出時の手提げ式持ち運び用のあかりであったらしい。それが江戸時代に、室内用の照明器具となって、形もさまざまに工夫された。図一に描かれているのは、「丸行灯」というタイプで、円筒形の覆い部分がスライドして明るさの調節ができる。

図二は現在市販されている灯明皿だが、仕組みは江戸時代とほぼ同じである。油を入れている皿を「油皿」、火を灯していると油が垂れるので、それを受ける「受け皿」、灯心の上に載せてあるのは灯心が浮かないための重し（搔き立て）である。灯心は、畳表たたみおもてに使われるイグサの茎の中身（スポンジ状になっている）を引き抜いたものなどが使われていた。写真では灯心を二本使っている。灯心の本数を増やせば明るくなるが、その分、油の減り方も早くなる。

油は菜種油（アブラナの種子から採る）が良質だが高価だったので、庶民には安価な魚油（イワシ）が使われることが多かった。臭いがきつかったであろう。それにしても油代は当時の米の値段と比べても高

いものだったから、明るさを調節しながら、油を大切に使用していたようである。図三は油売りが「油差し」に漏斗（ろうとう）と「じょうご」を差し込み、柄杓（ひしゃく）で注ぎ入れているところ。油差しは銅製の高級品から陶製の普及品までさまざまで、灯心を押さえる「掻き立て」も、凝った意匠のものが作られていた。行灯とその付属品にも実用性だけでなく粋なデザインを追求したのが江戸時代人らしさであろうか。

ちなみに蠟燭（ろうそく）は灯油よりさらに高級品で、江戸時代後期に生産量が増えるまでは寺社や武家屋敷などの限られた場所で使われていた。

その一 行灯をめぐる怪異のこと

このように、生活に欠かせない照明器具であった行灯は、浮世絵をはじめとするさまざまな媒体に登場する。座敷にさりげなく置かれていたり、図一のように女性が手紙を読んだり、針仕事をしたりする場面が多いが、なかには主役・準主役級で登場するものもある。ここでは行灯に直接関わる「怪異譚」について紹介したい。

妖怪「青行燈」

図四は江戸中期の絵師・鳥山石燕（とりやませきえん）による『今昔百鬼拾遺』に登場する「青行燈」である。石燕は『画図百鬼夜行』をはじめとする妖怪画が有名で、現代の漫画家や作家にも大きな影響を及ぼしたといわれている。

ここに描かれているのは行灯の後ろにたたまむ髪の長い女の姿で、頭には角を生やし、口は大きく裂け、見るからに異界のものである。行灯は一般的な角行灯、枠の一枚がはずれ、上段に灯明皿、下段には油差しが見えている。まわりには裁縫箱、ものさし、櫛、かんざし、

文箱と手紙が散らばっている。左側の詞書は青行燈の説明で、次のように書かれている。

燈きえんとして又あきらかに
影憧々としてくらき時

青行燈といへるものあらはるる事

ありと云 むかしより百物語をなすものは

青き紙にて行燈をはる也 昏夜に鬼

談ずる事なかれ 鬼を談ずれば怪いたるといへり

（註）燈＝ともしび
影憧々＝影がゆらゆらする
昏夜＝日没から夜までの間

これによれば、青行燈の出現は、灯火がまさに今消えようとしているとき、のようである。後半の百物語以下の文章は、有名な仮名草子『伽婢子』に同様の記述がある。『伽婢子』は江戸時代前期の僧侶であった浅井了意の編んだ怪談・奇談集で、寛文六年（一六六六）板行、十三巻から成っている。その最終話「百物語乃事」として「怪をかたれば怪至る」という一節がある。



図四 鳥山石燕『今昔百鬼拾遺 霧の巻』より「青行燈」一七八一年（国会図書館デジタルコレクション）

一部を引用すると、「百物語には法式があり、月くらき夜行灯に火を点じ、その行灯は青き紙にて貼りたて、百筋の灯心を点じ、ひとつの物語に灯心一筋づつ引きとりぬれば、座中漸々（だんだんと）暗くなり：（後略）」とあり、下京であった怪奇な事例が書かれている。そして「ことわざにいわく、白日に人を談ずることなかれ。人を談ずれば害を生ず。昏夜に鬼を語ることなかれ。鬼を語れば怪いたるとは此の事なるべし」と締めくくっている。

ここでは行灯に青い紙を貼ること、さらに一話ごとに灯心を抜いて次第に暗さが増し、語り続ければ必ず奇怪な現象が起こることは書かれているが、青行燈にはふれていない。

『伽婢子』の後、怪談はブームとなって数多の書物が出版された。青行燈もその中で登場したのかもしれないが、いったいどんな怪異を巻き起こすのか、今では想像するしかない。（『伽婢子』人文学オーブンデータ共同利用センター日本古典籍データベースより引用翻刻）

その式 行灯と猫の怪異

行灯の怪異といえは「油をなめる化け猫」を思い浮かべるのは筆者だけではないと思う。真打ちといえるだろう。残念ながら、行灯は脇役で、猫（化け猫）が主役であるが、どちらにとってもなくてはならぬ重要な登場人物（？）であることは間違いない。

図五は弘化四年（一八四七）七月に江戸市村座で上演された、三代目尾上菊五郎一世二代の江戸引退興行『尾上梅寿一代噺』役者絵の内の一枚で大判錦絵である。これは歌川国芳の画だが、他にも多くの絵師が同じ題材を描いている。



図五 歌川国芳『五十三次のうち 岡崎猫石由来の場』一八四七年
(浮世絵検索 <https://ukiyo-e.org> より)

中央の「古猫の怪」（老女の姿）が菊五郎で、後ろには女の正体である巨大な化け猫（三毛猫）が御簾を突き破って顔を出している。実際の舞台でも、巨大な猫の顔が御簾を突き破り、意表を突いた演出が大評判になったという。それはともかく、ここでは古猫のとなりの行灯と、手前にいる二匹の猫に注目したい。

行灯をよくみると、ぼんやりとした猫の頭の影が映っている。しかもそれは、油皿に舌を伸ばし、まさに油をなめているところである。しかしこの画面では、古猫がなめているようにには見えない。しかも、行灯の猫の構図が妙に形式的だ。なにも、猫の影を描き入れなくてもいいではないか：と思うのは現代人で、化け猫といったら行灯はつきもの、という「お約束」があったのかもしれない。実際に、江戸時代の猫は行灯の油をなめていたのだろうか。灯油が魚油だったら猫の好む臭いがしていたかもしれない。当時の猫は人間のごはんの余りももらっていたから脂肪分が足りなかった。だから油をなめていた、という話を最近読んだ。納得できる説のようでもあるが、これも今では想像するしかない。

おわりに―踊る猫たち―

行灯から怪異を連想し、それが怪猫につながったところで、最後に、行灯から離れて、怪しい猫についての覚えを書いておきたい。先の図五で、手前にいる二匹の猫が気になった。これも小物の怪猫であろうが、頭に手ぬぐいをかぶって踊っている。この「猫が手ぬぐいをかぶって踊る」というのも浮世絵に多く、猫に手ぬぐいは付きものだったかもしれない。

横浜市戸塚区に「踊場駅」という市営地下鉄の駅がある。初めて見たとき、変わった名前だと思ったが、なんとここは、猫たちが集まって踊った場所という伝承の地なのだ。駅構内にはこの由来が掲示されており、そこここに猫の足跡や猫のデザインがある。駅の至近にある交番のあたりが「踊り」の現場だったという。そして、同じような話が弥生神社のお膝元、海老名の地にもあることがわかった。



図六 横浜市営地下鉄「踊場駅」の天井灯

つけると、猫が集まって踊っているところに行き着く。飼猫が怪しい猫だとわかってても、人々はあまり動揺しない。戸塚では、宿場に噂が広まってしまい、見物人が増えたため、猫たちはどこかへ行ってしまうというオチがついている。

薄暗い行灯のあかりも、家の外の星明かりや闇夜の暗闇に比べれば、心から安心できる温かさをもっていただろう。そういうあかりを大切に、また多彩に想像をめぐらせた先人たちに、灯明を捧げたいと思う。

(文／たまい・ゆかり)

《参考と引用》

* 図二 高野好見晝店公式 web より <https://koyatakami.com/archives/6481>

* 海老名「猫の踊り場」『海老名のむかしはなし三集』海老名市公式 website

* 戸塚「猫の踊り場」『かながわのむかしはなし五〇選』神奈川県教育庁文化財保

護課 一九八三年

本を読む。 小河洋友

(おがわ・ひろとも / 図書館司書)

「灯り」を考える五冊を選んでみました。漆黒の闇がもたらす不安や恐怖を人類が克服してきた道筋には感嘆するばかりです。またそのことで失ったものがあるのも確かなのでしょう。山の星空がみたくまりました。

あかりや

照明家人生

劇団四季から世界へ

吉井澄雄 / 著

早川書房 (2018.6)

劇団四季の創立に参加し、以来日本の舞台照明をリードしてきた著者の回顧録です。照明家は舞台上で「光」と「時間」をつかさどる重要な役割を担っているとのこと。自伝、劇場論、照明論、随筆の四部構成になっており、戦後日本演劇史における貴重な証言録にもなっています。

本当の夜をさがして

都市の明かりは私たちが何を奪ったのか

ポールボガード / 著

上原直子 / 訳

白揚社 (2016.9)

東京で暮らしていると夜の闇を感じることはほとんどありません。本書では世界が明るくなりすぎたために起こっている「光害」の画像をさぐります。安全と便利さのかわりに失われていくものとは？闇がもたらす豊かさについて想像がふくらみます。

魅惑のアンティーク照明

照明

ヨーロッパあかりの歴史

イネスウージェル / 著

中山久美子 / 訳

西村書店 (2013.4)

オイルランプやろうそくから電気照明、ネオンが登場するまでのヨーロッパ照明史です。かつて照明器具は装飾物であり、高度な芸術性を備えたものがありました。本書では見とれてしまうほど美しい照明器具の写真を多数掲載しています。

「白い光」のイノベーション

シヨン

蛍光灯・発光ダイオード

宮原諄二 / 著

朝日新聞社 (2005.12)

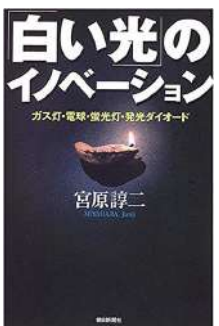
われわれの暮らしにすっかり馴染んでいる「白い光」。本書では白熱電球や白色蛍光灯が安価に大量生産され、いかに暮らしや産業を変えてきたかをたどりまします。50万年にわたり炎の黄色い明かりしか持ち得なかった人類にとって白い光は「イノベーション」であったとのこと。

灯 百年文庫

夏目漱石、ラフカディオ・ハーン他 / 著

ポプラ社 (2010.10)

「灯」という漢字一文字をテーマにしたアンソロジーです。収録されているのは夏目漱石『琴のそら音』ラフカディオ・ハーン『きみ子』正岡子規『熊手と提灯』ほか。漱石、ハーン、子規は同時代の日本を活動の場としており、通底するものを感じられるかもしれません。



ホタルブクロ



荒谷 渚

大人になり、幼少期の記憶がすっかり薄れても、なぜかいつまでも心の片隅に残っている場面がいくつかあります。そのうちの一つが、幼稚園の遠足で訪れた山の中で、初めて目にしたある不思議な形の花に心を奪われたことです。その名も、「ホタルブクロ」。初夏に釣り鐘形の花を咲かせる、キキョウ科の山野草で、日本各地で古くから親しまれている花です。まるで袋のような形の、透けるように薄い花の中にホタルを入れて、提灯のようにして遊んだからそう呼ぶのだと聞きました。想像力豊かな子供心をくすぐるような、面白い姿形と名前を持つ花です。この花の中にホタルが入った所を見たい、本当に提灯のように光るのだろうか？と、うずうずしたのを覚えています。

私が子供の頃には、学校からの帰り道、道端に生えているペンペン草やカラスノエ

ンドウをおもむろにむしっては、友達のように上手に鳴らせずがっかりしたりしながら、家に着く頃にその辺の草むらにぽいと投げていたものでした。昔の子供達は、そんな身近な遊びの一つとして、ホタルブクロを摘んではホタルを捕まえ、中に入れて可愛い提灯を作って遊んだのでしょうか。なんて風流な初夏の遊びでしょう。

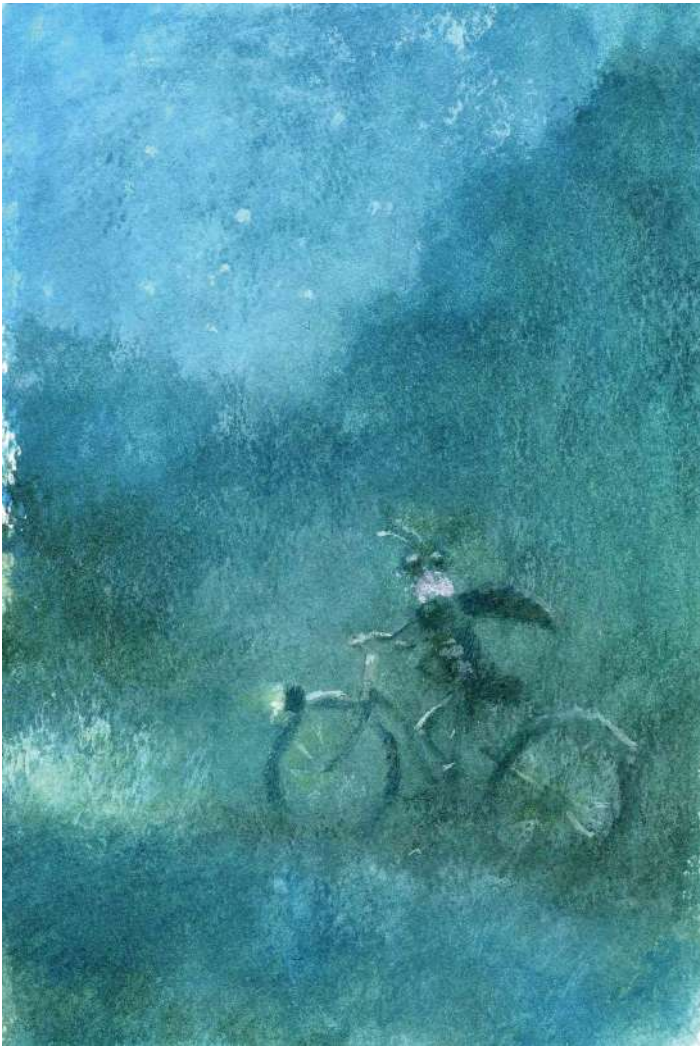
残念ながら、現在では人が多く住む街中で、ホタルブクロが沢山生えている所も、ましてや夜に蛍が飛び回る所は、あまりお目にかかれません。

初めてホタルブクロを見たあの日から長い年月が経った今でも、この花を見ると遠い子供時代の遊び心を思い出すようで、私にとって、少し特別な存在の花です。

(文・絵／あらたに・なぎさ)

蛍の自転車

カイズケン（画家）



「蛍の自転車」

中学生の頃ですが、夏に田んぼの中の真っ暗な道を自転車で走っていたことがあります。引越して来たばかりの団地は、少し行くと田んぼや沼の広がる環境で、その街灯の無い沼沿いの遊歩道を、塾の帰りに通っていたのです。最近の自転車のライトは、暗くなると自動的に常時点灯するバッテリー式のもが増えてきましたが、この時のライトは自転車を漕がなければ光らないもので、速度を緩めれば暗くなり、夜道の暗さが印象的でした。

田んぼの近くにさしかかった時、ふと回りの草やぶで何かがチラチラ光っているのに気がきました。それは蛍の光で、かつては日本中の田んぼの周りに普通に見られた、ヘイケボタルでした。引越し前に住んでいた、住宅地の中の団地では、家のそばに蛍が住んでいるなんて思いもよらず、それがこんな身近に見られたことが驚きでした。それだけ自然を遠くに感じていたのかも知れません。

この地元の蛍は、その後生息域は狭まったとは感じられるものの、今でも六〜七月になると、ごく一部の田んぼの周りなどで、そのかすかな光を目にすることが出来ます。それは、人工の照明にあふれた現代の闇の中で、なんと人の心に強く明りを灯すものでしょうか。毎年、この蛍の灯りを見るたびに、闇の中を自転車で走って見ていたあの光を思い出します。（文・画／カイズケン）

誰かがいます

谷口明子（陶芸家）

今日は春なのにものすごく寒かった。寒かったが今冷えたビールを飲み終えた。何を書いたらよいのか：冷え切った内臓でパソコンの前に座って小一時間固まっている。

：前回こちらに載せて頂いた文の中で、夜間飛行の機中から見下ろした大地のところどころに小さく灯りが寄り集まっているのが見えて、「町がある、人がいる」と思った、というようなことを書いた。この時、当然地上の灯りと飛行機の中の私には距離があり、灯りをともしている地上の人たちの姿は見えないし、彼らが私に何か働きかけてくる可能性もなかった。だから私もそれらの灯りを単に景色として、星を見るような気持ちで見ている。灯りのところに人がいるということを、忘れようと思えば忘れられる感じだった。大都市の夜景をちりばめた寶石のように観賞するのも同じ感覚だろう。そしてそれはベクトルを誤ると怖いことになりうる感覚だと思った。



お買い物帰り（プラハ）

数年前、某国の若い女性兵士が、遠隔操作のモニターだけを見てまるでシューティングゲームを楽しむように下界の敵地を爆撃している映像を観たことがある。シヨックだったが、あれくらい感覚麻痺は意外と簡単に陥ってしまうのかもしれない。自分は絶対あんなふうにならないとは言えない。灯りがもっている場所には、誰かがいる。その誰かがその生活や仕事の事情によってもしている唯一無二の灯りである。灯りはただの物理的現象ではなくて、誰かの意思と活動の表れだ。そのことを意地でも意識し続けられるかどうか：と考えつつ、寒さが限界になったので風呂へ。風呂場に灯りをつける。私の活動の表れ。

（文・写真／たにぐち・あきこ）

ともしび

高崎淳子（歌人）

野山や海辺を散策するのが好きです。桜の気配に山路を登れば、菜の花にいろどられた谷のあなたに藍の海が見えます。竜王の山の万本の桜がゆらめきうごめき靈力を発し、異界を開くように感じさせます。秋はアサギマダラの飛来にヒヨドリバナ類、うすべにのサワヒヨドリやサケバヒヨドリが咲き乱れます。

私の好きな故郷の海は西にあります。瓏銀や朧銀という表現がありますが、瀬戸内海の穏やかな日の午後が見せる海の彩は、まさにその言葉を選ばせません。山路からみれば一枚のたいらかな銀板のようであり、渚にたたずめば梨子地のようです。さらに夕陽の美しさは夕陽百選に選ばれるほどです。この世のともしびとして夕暮れの色彩のバリエーションを見せます。おのずから西方浄土をも連想し、先だって逝った人、父や師匠や歌友を思い浮かべるのです。

世の中にありて桜のともしゆく春のとほそに風
わたるらし

瓏銀の海にくらくら落つる陽に祈ることばはむ
らさきに染む

異郷での生活が三十六年ありましたので、少女時代弾いていたピアノが弾けなくなっていました。帰省の折も開くいとまもなく、実家にインテリアのように古びていました。帰郷後、とりあえず「子どものツェルニー」からリハビリを始めました。数十年ぶりに破壊寸前の音を調律してもらい、少しずつ指をならし、楽譜を弾くということを思い出していきました。アレグロにはならずアンダンテですが、脳トレにはなりません。ツェルニー練習曲やピアノの初級編に加えて、懐かしい唱歌、児童生徒の頃馴染んだ曲が載っている「シニア名曲集」中のイギリス古曲「埴生の宿」、ロシア民謡「ともしび」はよく弾く曲になりました。哀愁を奏でるロシアのメロディにまたたくともしびは、兵士と乙女の愛の物語の象徴です。〈おとめの愛の影〉〈祖国の灯〉〈こがねのともしびとわにきえず〉とイメージは小さな胸のともしびから普遍のともしびにアップされていきます。ロシアに限らず、万人がもつともしびのイメージがここにあるようです。人があり心のあるところにともるのです。



山陽小野田市竜王山 桜風景

冬の散策には、山茶花が人家の生垣を点しています。磯の香を感じながら、浜までくると焚火の煙が昇っていました。焚火自体みることが少なくなりました。そういえば手紙を焼くなど昔のことになってしまいました。日没後の残照の空に家々の窓が点り始めます。たしかに人が住んで平和に生活を営んでいる人里のともしびです。

はるる夜の星か河辺の螢かもわが住むかたの
海人のたく火か

『伊勢物語』八十七段の漁火は、夕暮れのともしびとともに思い出す和歌のひとつです。

(文・写真／たかさき・あつこ)

―高崎淳子 歌集・歌書―

- 一九八六年一月 歌集『寒昂』ながらみ書房
- 一九九一年二月 歌集『夜想曲』雁書館
- 一九九二年九月 『現代歌枕紀行(共著)』雁書館
- 一九九四年二月 歌集『一の坂川』雁書館
- 一九九八年十月 歌集『バンユエ』角川書店
- 二〇〇一年十二月 歌集『風の迷宮』角川書店
- 二〇〇六年十一月 歌集『朧光亭日乗』角川書店
- 二〇一〇年三月 論集『中国旅行詠の世界』角川書店
- 二〇一二年八月 歌集『卜音記号の水』本阿弥書店
- 二〇一六年八月 歌集『難波津』ながらみ書房



女川中心市街地

山歩きと生命の灯り

黒崎 浩行（宗教学）

この一年の間に三度、宮城県沿岸部の山道を歩く機会があった。

一度目は、昨年八月、牡鹿郡女川町。女川三十三観音という、同町出身の独和和尚が文政七年（一八二四年）に五穀豊饒天下泰平を祈って建立したとされる石碑群を、一番碑楊柳観音から三十一番碑持蓮観音まで巡拝した。途中の十二番碑水月観音は八年前の震災のときに谷に転落したらしく、まだ見つからない。また、三十三番碑灑水観音は倉庫に保管されているという。樹木に覆われた山道を歩き、三十二番碑とその近くの大杉にたどりつくと、急に視界が開けた。女川湾と、復興まちづくりが進んだ女川駅周辺の市街地が見渡せた。

二度目は、昨年九月、本吉郡南三陸町歌津地区と気仙沼市本吉町小泉地区の境にある田東山。「行者の道」と呼ばれる、かつて行者が修行のために歩いていたという道を歩いた。震災のときに歌津地区にボランティアとして訪れ、その後地元の小学校と連携して「歌津てんぐのヤマ学校」を開いた八幡明彦氏（平成二六年に逝去）が「蜘蛛仙人」を名乗ったのは、ここにある蜘蛛滝にちなんだものだった。その場所に、ようやく行くことができた。



田東山

三度目は、今年五月、石巻市雄勝町の石峰山。延喜式内社である石神社のご神体が祀られている。ふもとにある葉山神社で十二年に一度の亥年御開扉大祭が開かれたおりにお参りした。

子どもの頃よく父に連れられて山道を歩いていたが、そのとき不思議な感覚が訪れることが度々あった。息を切らしながら眼前の風景の中を進んでいるのは、他の誰でもないこの私であり、その私は今ここにしかない、という生命の実感であった。

これは、生きる意味ではなく、ただ生きることの肯定、と言ってよいかもしれない。自分に対しても他人に対しても忘れそうになるこの感覚を、山道を歩いていると呼び戻すことができる。

しかし、自分が子どもの頃には気づかなかったことだが、そのような山道もかつて誰かが開き、歩き重ねていたのだった。釈迦空の歌、「葛の花踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり」が思い出される。連れていってくれた父のおかげ、ということにもあらためて思い至った。

山尾三省の「火を焚きなさい」という詩に最近出会った（『火を焚きなさい』山尾三省の詩のことば）野草社、二〇一八年）。夕暮れ時、子どもたちに風呂焚きを促す情景が思い浮かぶ詩だが、その火は「人間の原初の火」であり、そこから「お前達自身の昔と今と未来の不思議の物語」が聴こえてくる、という。過去から伝わってきた、自分自身の生命の火を灯すわざを、未来を生きる子どもたちに伝えていくことの大切さがうかがえる。私にとってそのわざは、山道を歩くことだったのかもしれない。

（文・写真／くろさき・ひろゆき）

山の時間

中村政子

井の中の蛙

冬木立の中に発見する鮮やかな黄緑色の繭、ウスタビガの繭だ。一旦通り過ぎ、それでもその美しい色に引き寄せられて、車をバツクさせる。色のない冬の山の、思いがけない灯りである。山奥の暮らしは、思いがけないものとの出会いに富んでいる。

朝夕の散歩が日課となったのは、わが家に犬が来てからのこと。昨年の夏祭りの翌日に、仕事場の周囲をウロウロしていた迷い犬が、役場の村内放送にも保健所の掲示板にも名乗り出る飼い主はなく、わが家の飼い犬になった。白地に薄茶の斑点のある、中型の雑種である。

散歩のコースは、道路からはずれて集落の境界を歩くことが多い。集落は南向きの斜面にあるので、下れば川原へ、登れば森の中へ、そして東西はどちらも急な崖になっている。東の崖上には、梅の木の植えられた桃源郷ならぬ梅源郷があることを、三十年住んで初めて知った。水場もあれば、栗や胡桃の木もある。おまけに葉を広げたまま枯れたワラビまで見られることから、主が不在になるまでは

大いに活用されていた土地らしい。逆の西のはずれに立つと、切り立った崖が目の下にあり、いつもそこは風が吹き上げていて、冬は特に寒い場所である。崖の縁はケモノがここを通り道として使うようで、わが家からここを往き来するケモノのシルエットを見かけることがある。ある時はイノシシの親子が並んで通り、ある日はイタチのような小型の胴長なシルエットが走っていた。

集落の境界に立つてみると、自分が住む集落の中とは違う空気が流れているのがわかる。集落は、やはり人の世界。境界は人の世界と野生の世界との緩衝地帯といったところだろうか。

もう一つの散歩コースは、空家の庭先を拝借している。訪ねる人もいなくなった庭は、伸びた草がそのまま枯れ、野良猫だけが入りしているようだ。この家の前を通り抜け、栗林を過ぎ、耕す人のいなくなった畑の真中でひと休み。ここから眺める、雪を冠った南アルプスは絶景なり。

そしてこの畑には、昔、家畜用飼料のサイレージ作りに使われた土管が埋め込まれている。井戸のように見える土管だが、中には本当にいつでも水が溜まっている。おそらく雨水が溜ったものと思われる。その中に、六匹の掌大のヒキガエルが住んでいるのに気がついてから、それを確認するのが日課に加わった。

春先の雨の日には、山道の運転には常にも増して注意が必要となる。一つは落石が多くなることに。もう一つは道を横断するヒキガエルに。山で冬眠していたカエルが谷間に下って行く時期は、よほ

ど注意して運転しないと悲劇が起こる。晩秋の雨の日も、今度は逆コースを辿るカエルに、また然り。

土管の中のカエルたちは、おそらく川まで下る手前で水場を見つけて産卵し、それが孵った子たちではないか、その中で生き残ったものが、この六匹だったのではないかと想像してみた。初冬までは、中を覗くとウジャウジャという感じに見えていたが、寒さが厳しくなるにつれ、カエルの動きは鈍くなり、ついには氷の下にじっと動かぬ姿を見るようになった。本来なら土の中で眠る季節なのに、土管の外に出ることも叶わず、果たしてこの冬を越せるのだろうか。



集落から西を望む

「井の中の蛙」とは、広い世界を知らずに、狭い世界に生きていることのたとえだが、この山奥の集落に、かつて住んでいた年寄りたちの中には、本当に集落からほとんど出ずに一生を終えた人たちがいた。自給自足で暮らしてきた時代には、家を離れることなど考えられないほど、毎日毎日農業や林業に従事してきた人たちだ。一生をこの土地だけで過ごすのも、そんなにめづらしいことではなかっただろう。生きるために懸命に働いてきたのは確かだが、そのことを不幸とみるかどうか、一概には言えない。今では九十五歳になる愛子さんひとり例外で、あとはみな自分で車を運転し、好きなように出かけて行く。

「井の中の蛙」は大海を知らない。「されど、空の青さを知る」と続けられることもあるらしい。集落という井の中の暮らしは、案外と奥深くて豊かなのだ。同じように季節がめぐり、代わり映えのない生活のようでも、日々新しい発見に満ちている。井の中の暮らしも、まんざらではないと思う近頃なのである。山奥の小さな世界で生きるのは、足ることを知りさえすれば、実は居心地が良いものだ。

さて、畑の土管の中のカエルたちだが、一月二月の厳しい寒さで四匹が死んでしまった。三月には二匹の生きた姿を確認したのに、気温の上昇とともに水が濁り、それ以後二匹の姿を見ない。濁った水の中に隠れているのかもしれないが、ようやく迎えた春に命を落としたのだとすれば、お釈迦様がかんだた韃陀多を救おうとしたように、もっと早い時期に蜘蛛の糸を垂らすべきだったのかもしれない。自然界の営みに手出しは無用と思うのだが、心の一隅にかすかな後悔が残った。

(文・写真／なかむら・まさこ)

神話へのまなざし

ひのかみかぐつち
火神軻遇突智が生るるに至りて、其の母伊弉

なみ
冉尊、焦かれて化去りましぬ時に伊弉諾尊、恨

みて曰はく、「唯、一児を以て、我が愛しき妹

に替へつるかな」とのたまひて、則ち頭辺に葡

うば
匍ひ、脚辺に葡萄匍ひて哭き泣ち流涕びたまふ。

（『日本書紀』巻第一）

火の神軻遇突智（かぐつち）が生まれるとき、その母伊弉冉尊（いざなみのみこと）は、身を焼かれておかぐれになった。そのとき伊弉諾尊（いざなぎのみこと）が恨んでいわれるのに、「ただこのひとりの子のために、わが愛妻を犠牲にしてしまった」と。そして頭のあたり脚のあたりを這いずって、泣き悲しみ涙を流された。

―火神の出生をめぐって―

中村 聡（神職・国学研究家）

天つ神たちから伊弉諾尊・伊弉冉尊へと任されて始まった壮大な「国生み神生み」の神話は、火の神を生んだために伊弉冉尊が焼かれおかぐれになるといふ悲壮な結末を迎えることになる。

『古事記』『日本書紀』（以下「記紀」）ともに、このあと怒りに荒ぶ伊弉諾尊が、「十握剣」^{*とつかのつるぎ}を用いて火神軻遇突智を斬る（「被殺」）様子が記されている。身体を三段に切られた火神の一部は勢いよく舞い上がり、高天原の「五百箇磐石」^{*いほついはむら}になったといわれる。

江戸時代の国学者本居宣長は、大著『古事記傳』^{*こじきでん}において、この場面にも細かな注釈をつけている。言葉の意味を踏まえながら、私意を加えずに文字を解釈するという方法は、宣長たち国学者のもっとも基本的な学問態度であった。

*十握剣（とつかのつるぎ）…刀身が十つかみほどの長さの剣

*五百箇磐石（いほついはむら）…とてもたくさん石

*『古事記傳』（こじきでん）…『古事記』全編にわたる全四十四巻の註釈書。

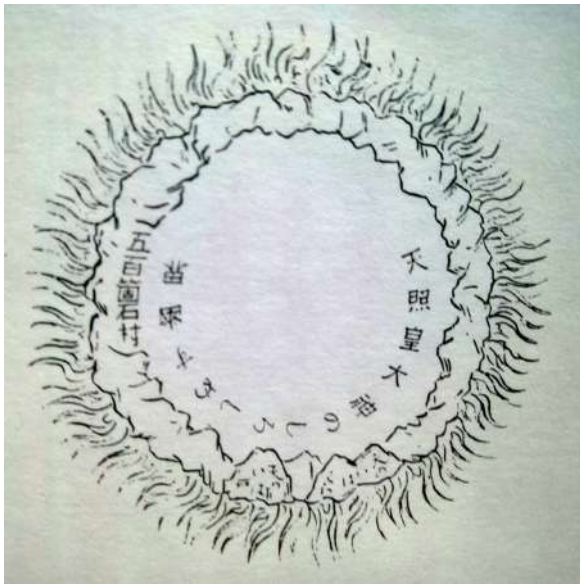
本居宣長著。明和一（一七六四）〜寛政十（一七九八）年に執筆、寛政二（一七九〇）〜文政五（一八三二）年に刊行。

しかしその後、宣長の弟子にあたる平田篤胤あつたねの登場によって、それまでの方法論と神話解釈のまなざしは大きく飛躍することになる。篤胤は、

「火産靈神ほむすびのかみを斬り賜たまへる御刀みはかしの刃の血みの、天上あめに激たばしり上あつたことを受けて、「天日あまつひを目めのあたり見放みさけ奉まつるに、火の盛まに燃もて見ゆるは、この始いはれの謂たまのみはし」(『靈能真柱』)

と述べた。つまり、火神の一部(火の性質が強い血)が高天原に燃え移ったことを、今も目にする太陽の炎の始原としたのであった。

篤胤の教えを信奉する弟子たちも、この説を変容させながら受け継いでいく。幕末国学の巨人ともいわれる大國隆正は、



日球の図 (大國隆正)

(輪の内部には「天照皇大神のしろしめす幽界」
外殻には「五百箇石村」の文字が記されている。)

「日球ひきゅうに火をひく性さがありて、かぐつちの血、天にのほり石となれるなり」(『天地神人名義考』)

と述べている。日球とは太陽を指し、火神軻遇突智の血が五百箇磐石、つまり太陽という球体の外殻になったというのである。また、

「人は地球にそひて地球とひとしく、眼めすびより雌火はつを發し、身おすびより雄火をふくみてあり」(『神理一貫書』)

とも述べている。地球内部にマグマがあるのと同じように、人体内部には「火」の性質と等しい体温が宿っていることを、西洋で広範に行われていた分析学分析学(窮理学*ききゅうりがく)の知識を様々に駆使して、「記紀」に示される内容を一つ一つ考証したのであった。

*窮理学(ききゅうりがく)：江戸後期から明治初期にかけての物理学の称。

「火神被殺」的一幕から、太陽の炎の発生や、生命体の根幹である体温の関わりにまで憶測を深めた発想に、当時も今も無理解と批判があるのは当然である。しかし、誰しも日々の生活で実感しているはずの自然現象の何気ない不思議さを、理論立てて説明しようとした営みは興味深いものがある。

神々の働きは、決して荒唐無稽な太古の「物語」でも「死物」でもなく、現在もいきづく「事実」であり「活物」であることを、国の人々は証明しようとしたのであろう。(文/なかむら・あきら)

*窮理学(ききゅうりがく)：江戸後期から明治初期にかけての物理学の称。

【参照】宇治谷孟「日本書紀(上) 全現代語訳(平成二十四年) 講談社

カイコ 蚕の神様を訪ねて

谷口悌三

(映像作家／民俗研究者)

(四) 春蚕の季節

蚕種紙と掃き立ての縁起物

養蚕とは、蚕蛾の幼虫を育てて、蛹まゆの入った繭を収穫するという農業です。その後、繭から繰り取られた生糸を使って絹織物などが作られます。

幼虫(いわゆるカイコ)を育てるエサは、桑の葉です。春になると美味しそうな桑葉が芽吹いてきます。

そして暖かい日が続くようになった四月から五月頃に卵が孵化します。カイコの卵は、ケシの実のように小さいことから「蚕種(タネ)」と呼ばれます。蚕種は明治時代中頃までは、和紙の全面に産み付けられたものが取引されていました。

この蚕種紙の上から、カイコが生まれます(1齢)。この頃は、二三ミリ程度の小さな毛虫のような状態なので「毛蚕(けい)」と呼ばれます。

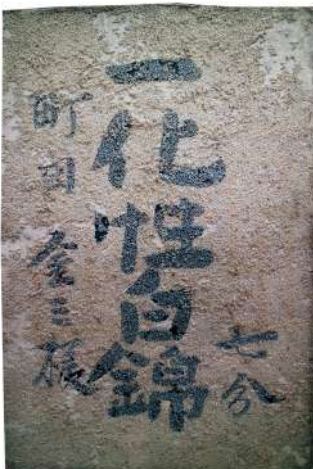
さて、この和紙の上に生まれた小さなカイコにエサを与えるには、どうしたらよいでしょうか？



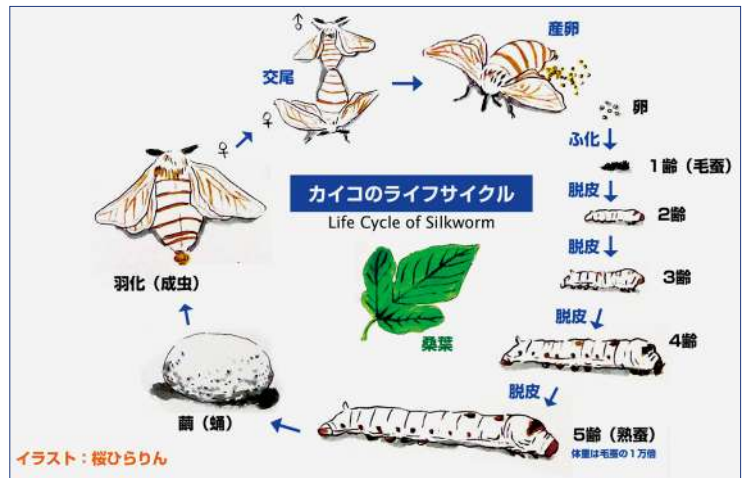
桑の新芽



桑葉



蚕種紙



蚕のライフサイクル

それは、小さく刻んだ桑葉を蚕種紙の上にのせて、およその毛蚕が桑葉に移ったところで羽箒を使って掃き、カイコに桑葉を与えるのです。これを「掃き立て」といい、まさにここから養蚕が始まる大事な場面です。それゆえ「みんな立派に育ちますように」と願って、その羽箒はヤマドリやタカノ羽などを使い縁起をかついだものを神社でも授与していたようです。

また、この掃き立ての縁起物として箸の授与をする神社もあります。この箸を使って、蚕種紙の裏側からポンポンと叩いて残った毛蚕を落とすのです。毛蚕のうちはとても小さくて病気にも弱いので、衛生に気を使って箸を使って世話をします。

それにしても、どうして箸なのでしょう？

掃き立てで、生まれたての毛蚕に初めてのエサ(桑葉)を与えることになり、すので、いわゆる「お食い初め」おへぐぞめ(「祝い箸」なのではないでしょうか。

「蚕」という字は「𧈧」と読みます。「養蚕」蚕(こ)を養(か)う＝かい・こ」なので、農家さんが「おかいこ」といえる養蚕をするこ(こ)を表現します。また蚕のこ(こ)を「お蚕(こ)



弥生神社境内に鎮座する「蚕影(こかげ)神社」

*手に「掃き立て」の羽箒を持つ保食姫命が描かれている。



「掃き立て」の護符

*「養蚕万足」の文字が記されている。



「掃き立て」の授与品(箸)

さま「オコサマ」と呼ぶ地域も多く、それが「お子さま」と同じ音であるのはきつと偶然ではないのでしょうか。

江戸時代後期になると「養蚕秘録」(一八〇三年)などの養蚕技術書がたゞさん出版されました。その中に、聖徳太子の養蚕訓として「蚕を養ふは父母の赤子を育つるが如し、蚕を思ふこと我子を思ふが如くせよ」という言葉が記述されています。

蚕は愛情を注いで大事に育てなさいという教えは、実際の作業を担っていた女性たちにとって、子どもたちが健康に生長できるようにという願いと結びついていきました。

現在のように医療保健環境が整備されていない当時は、乳幼児死亡率も高く、神仏への信仰が生活に根ざしていました。また、生計の多くを養蚕に依存していた農家では、蚕が病気になるように、霜害など自然災害にあわないようにという祈りも欠かせないものでした。

そうした背景から、養蚕地帯の神社では、お蚕さま「お子さま」への祈願、養蚕倍盛と安産・子育ての安全をともに祈る人々がよく訪れていたのです。

(文・写真/たにぐち・ていご)

泥染めの旅

～奄美大島へ～



上岡 和江

(写真・4)

奄美大島には大島紬と言う素晴らしい織物がありますが、とても高価なこともあって、長い間私は興味を持ちませんでした。しかし、三年前に奄美を訪れ、染め工房や紬村を見学したのをきっかけに、大島紬の色を染め出す、泥染めに興味を持ちました。そして今年三月に再訪して、染めをしてきました。

泥染めということばは、以前から知ってはいました。東京のあきる野市では糸工房「森」というところで、黒八丈を復元しています。森さんはヤシャブシ（夜叉五倍子）と、鉄分を多く含んだ土で黒を染め出しています。それでも私は、奄美の泥染めについて考えることはなく、泥染めだから泥で染めるのだろうくらいにしか思っていなかったのです。

奄美の金井工芸では、職人さんに混ぜて好きに作業をさせてもらえます。藍瓶もあるので泥染めの他に藍で染めることもできますが、折角の奄美での染め物体験なので、私は泥染めを希望しました。すると案内されたのは泥田ではなく屋内で、シャリンバイ（車輪梅）の染液を用意してくれました。

「????これは?」

「テイチ木」

「テイチ木って?」

「奄美ではシャリンバイのことをテイチ木とい
います。」

「そうですね。シャリンバイの色は私も好きですが、今回は泥染めがしたいのです。」
こんなかみ合わない会話をしながら、それでも少し

ずつ泥染めについて分かってきました。

以下は教えてもらった手順や周辺知識です。

* 染液はシャリンバイの幹をチップにしたものを二日間煮出してつくる。(写真・1)

① その染液（タンニンを多く含む）に染めたい物（仮に布と呼びましょう）を浸し、よく揉み込むようにしてから絞る。

② 別の器に、ぬるま湯を入れ、石灰を溶かして布を浸す。
(中和するため)

* ①と②をワンセットにして、10セット繰り返し
(写真・2)、それから泥田の中で良く泥を揉み込む
(写真・4)。これが一工程で、水洗いをしてから
この工程を4〜5回繰り返す。

* 泥の中には鉄分を多く含むので、車輪梅のタンニン
が鉄媒染されて段々と黒に近づいていく。

つまり、泥染めと言われているものは、泥で染める
のではなくて、テイチ木で染めてから鉄媒染するとい
うことだったと、やっと分かりました。

私は四年ほど前に、カンボジアで染め物の体験をしました。内戦時の混乱で絹の生産が途絶えてしまったのですが、日本人の森本喜久男さんという人が、とても苦労して養蚕から織物までを復活させたのです。その森本さんの作った村を訪問した時のことを、鉄媒染
ということ思い出しました。

大きな瓶の中に媒染液があるので、汲み出して使う
ように言われたので、瓶の蓋を開けて中を見ると、水
の中にはカンボジアの内戦時に使われた銃やライフル

が沢山浸かっていました。ライムを入れてその酸で錆を促進しているとのことでした。思わず鳥肌が立ちました。鉄媒染と一口に言っても、世界の広さを思わされました。

話を元に戻しますが、泥田の土は非常に粒子が細かく、片栗粉を水で溶いたような感じですが。その中に入ると、底なし沼のように段々と沈んできて、足を抜くのが大変になります。そして泥と水分をたっぷりと含んだ布は重たくて、中腰でいると十分位で腰が痛くなってしまいます。水洗いをする時にも、布の中に入り込んだ土を落とすために何回も何回も濯ぐ必要があります。その時は、半日で切り上げてしまいました。職人さん達の大変さはよく分かりました。短時間のため濃い色は出せず、茶色がかったオレンジ色のような色の染めになりました。

泥の中の鉄分は、染め物に使う度に失われてゆきますが、蘇鉄の葉を田の中に入れることでまた補うことができますという話を聞きました。鉄が蘇鉄から蘇鉄。ほんとうでしょうか。泥染めが始まる以前から蘇鉄という植物はあったと思いますが、興味深い体験ができた旅でした。

そして今年再び、奄美を訪れたのです。自分で紡いだ糸や、絹の布も一反用意して、やる気満々で行きました。しかし、すぐに腰が痛くなるのは前回と同じです。



(写真・3)



(写真・2)



(写真・1)

そして気になっていた蘇鉄のことを、別の泥田で質問してみました。すると全く違う答えが返ってきました。そこは周囲を山に囲まれた山裾にあります(写真・3)。山肌には土が露出した場所があり、赤い色をしていました。つまり雨の後、山から鉄分を含んだ水が流れ込み、田んぼの鉄分が回復するという説明でした。周辺に畑があると化学肥料や殺虫剤等が泥田に流れ込むので、豊かな森のある山裾が良いのだそうです。化学薬品が入れば気付くよう鯉を泥田で飼っており、イモリもいました。「ハブもたまに顔を出す、それも生態系の維持には大切」とのこと。ハブは出たら困りますが、話に説得力がありました。

今回は何回か染め重ねたので、かなり濃い茶色のものと薄い色のままのものとの二色の染めができました。同じ奄美大島でも、職人さんによって考え方や方法が違い、泥田によって色も違うらしいので、私などはまだ入り口にも至っていませんが、また挑戦したいと思いました。

帰宅して、何度も水洗いをして泥を流しながら、アメリカのアリゾナで夫が買って来たTシャツのことを思い出しました。アリゾナの砂漠の土で染めたという、明るい茶色のTシャツで良い色ですが、見るからに洗濯には弱そうでした。水洗いをしたところ、思ったとおり無残なほどに色落ちしてしまいました。あれは、本当に土で染めて色止めもしていなかったのでしょうか。本当に奥の深い、泥染めの世界だと思いました。

(文・写真／かみおか・かずえ)

パイナップルケーキ

今では季節を問わず店頭に並んでいるパイナップルですが、爽やかな甘味はやはり初夏によく似合います。

フレッシュなパイナップルを煮詰め、しっかりととしたチーズ風味の生地で挟みました。後味にほのかに香る黒胡椒がポイントです。



パイナップルケーキ
20×13×2cm 1個分

バター 100g
砂糖 30g
塩 1g
スキムミルク 10g
粉チーズ 6g



ヨーグルト（水切りしたもの） 20g

卵黄 1個
薄力粉 150g
黒胡椒（ホール） 5粒



パイナップル果肉 1/2個分 約450g
砂糖 220g（果肉量の50%が目安）
水あめ 大さじ1

下準備・1

1 パイナップルの皮を除き、果肉を5mm程度の角切りに、芯の部分はさらに細かいみじん切りにします。鍋に入れ、分量の砂糖とからめます。

※写真はテフロン加工の深型フライパンと耐熱性のゴムベラを使用しています。

2 火にかけて、強く中火で煮詰めていきます。

水気が飛び、とろみが付いてきたら水あめを加え、焦げないように混ぜながら全体がねつとりと餡色になるまで煮ます。



3 オープンペーパーを敷いた焼き型に移して全体にひろげ、粗熱を取ります。

※冷めるとシート状に固まります。

下準備・2

バターは室温に置き、指で押してへこむ程度の柔らかさに戻します。粉は計量後、冷やしておくといでしょう。黒胡椒は乳鉢などで粗めに碎きます。オープンには180度に予熱。型にオーブンシートを敷いておきます。

作り方



1 泡立て器でバターをクリーム状にし、砂糖・塩を加えます。さらに白っぽくなるまで攪拌し、粉チーズ・スキムミルクを混ぜます。卵黄・ヨーグルトを加え、均一になるまで混ぜます。



2 薄力粉をふるい入れ、ドレッジ（スケツパー）に持ち替え全体がそぼろ状になるまで切り混ぜます。



3 手で押し付けるように全体をまとめ、ビニール袋に入れます。

4 型の幅に合うように生地を伸ばし、冷蔵庫で一時間程冷やします。伸ばした生地を二等分し、一枚を型の底に敷き込みます。
※べとついて作業をしづらいようであれば、もう一度冷蔵庫で生地を冷やすと扱いやすくなります。



5 生地の上に煮たパイナップルのせ、砕いた黒コショウを均一に散らし、もう一枚の生地をのせます。



6 オープンの温度を160度まで下げ、30分程度、薄く焼き色が付くまで焼きます。色付きやすい生地のため、低めの温度ですっきりと焼き上げましょう。



7 型のまま完全に冷まします。可能であれば一晩置くと、生地がしっとりとして切り分けやすくなります。



弥生神社で開催する行事のお茶菓子にもたびたび登場します。とつても美味しいですよ。

台湾土産で有名な鳳梨酥のようにひとつひとつ包餡はせず、焼成後好みのサイズに切り分ける、ご家庭向けのレシピです。
余ったパイナップルを冷凍しておき、休日に煮るのもよいでしょう。（その場合、解凍時に出た水分も忘れずに加えます）
よく熟れたパイナップルを刻み、火にかけると、爽やかな甘い香りが部屋中に広がります。
（権禰宜 池田沙）

弥生神社で開催している各講座を、最近の回のテーマとともにご紹介いたします。

「神道を考える」

講師 中村 聡

「神道」ってなんだろう？そんなシンプルな疑問をもちながら、神社・神道の様々なトピックを、レクチャーから学び、参加者の皆さんと考え合う入門講座です。参拝作法など神道の基礎知識から歴史より学ぶ神道の思想まで。ワークでは、紙垂を折ったり祝詞を書いたり。より神社に親しむ講座です。

第二回「神道のお葬式―神々の物語と先祖の霊、神職たちのこころみ―」（7月13日）

「生と死をめぐる―民俗・考古編―」

講師 玉井ゆかり

日本人の「死生観」をテーマに、中世の葬送の様相や墓制について、あるいは祭祀やまじないといった生に関わる行為まで、「庶民レベル」に視座を据えて探っていきます。考古学の成果や民俗学、歴史学…と多様な方法でアプローチします。ワークでは縁起の結びや茅の輪など古来の風習にちなんだものを作ります。

第三回「大祓―水際の祭り・土馬・人面土器―」（6月22日）

「蚕の世界」

講師 上岡和江

真綿や生糸、世界の蚕事情などをテーマに、幅広く蚕の世界を追求します。古典文学にみられる日本の繭や絹文化もご紹介。実際に、繭からの真綿とりや座繰り機での繰糸などを見て触れて学ぶ体験型の講座です。真綿や生糸で飾りや小物を作るワーク付き。

第一回「真綿に触れる―祈りと手仕事―」（5月3日）

「古代エジプト人の精神世界」

講師 和田浩一郎

ミイラづくりなど葬送をめぐるテーマを軸に古代エジプトの人たちの精神世界、文化や暮らしにせまります。毎回のワークでは、エジプトの聖刻文字ヒエログリフを、エジプト土産のパピルスに革ペンで模写し、カードに仕上げます。第六回「死者を護り、死者を飾る」（6月1日）

7月28日より講座「古代の土の器」が

始まります（講師 福田健司）。このほか毎月開催の『大祓詞（おほはらえのことば）』書写会、節句の風習を体験する季節ごとの行事や、お守り袋作り、勾玉守り作り、御朱印帳作りなどのワークショップを開催しております。各種行事の詳細い内容は、境内の掲示板やホームページご案内しております。お気軽にご参加ください。

編集後記 春から初夏にかけて、弥生神社にご縁のある皆さまに文章を寄せていただきました。まためぐりくるこの季節に読み返したい、さまざまに余韻が残る一冊になりました。ありがたございました。テーマは灯り。蠟燭の灯、灯明、行灯、螢火、風景や心の中に灯る灯り。言葉紡ぐことで多様な火が灯されていくようです。

「二燈を掲げて暗夜を行く」。学生時代の恩師の言葉を思い出しました。当時は知りませんでした。幕末の儒学者・佐藤一斎の言葉だったようで「暗夜を憂うることなかれ。ただ一燈を頼め」と続きます。信じる一燈があればどんな状況でも自分で判断し進むことができる。そんな拠りどころとなる価値観や思想を育てるべく、学ぶこと。そして迷わず進めど。私なりの解釈でしたが、心に抱いていました。

もう一つ思い出されるのが、ある夏の亡き人たちを偲ぶ灯籠流しの光景です。川面を流れる無数の灯が一人一人のひとつひとつの魂のように見えました。灯籠を見守る人たちの思いがその灯りに映し出されたのかもしれない。死者たちと灯籠を見つめる生者が灯火を通して共存する温かくて重層的な光景でした。

「灯り」は小さくとも確かに熱を持ち、生命や魂にも例えられます。そして闇を照らす安心感と温かさがある。ひとつふたとつと灯心が触れることで伝わり、新たな灯を灯すことができる。弥生神社でのさまざまな活動を通して、皆さまの心に生きる力となるような小さな灯りをお届けできますように。（権禰宜池田奈）

印刷 文明堂印刷

編集 発行 弥生神社

神奈川県海老名市国分北 二一三三―一三